

## 生活単元学習「地域の先生」 ～ トイレ掃除学習を通して身につけたい力～

熊本県立荒尾支援学校

### 生活単元学習「地域の先生」について

本校は、学校教育目標に「一人一人の自立と社会参加を目指し、地域・社会に開かれた教育活動の展開」を掲げています。その具現化を目指す具体的教育指針には「地域の人的・物的資源を活用した教育活動の推進」を掲げ、教育実践に取り組んできました。

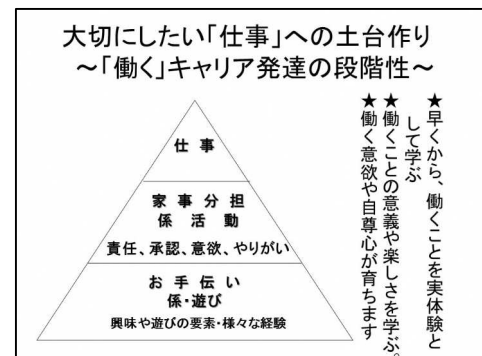
本報告では、このような考えに基づき、荒尾・玉名・長洲等、本校周辺地域で活躍されている方々をゲストティーチャーとしてお招きして実践した、小学部生活単元学習「地域の先生」（右表）から、ボランティアグループイタチごっこの会様とともに取り組んだ「トイレ掃除体験」について、学習や子どもたちの学びの様子を報告します。

生活単元学習「地域の先生」単元の概要

次	題材名	ゲストティーチャー	内容
1	万華鏡づくり 9月12日	熊本県環境センター (水俣市)	【環境問題】廃材ガラスを用いた万華鏡づくり
2	金魚売り体験 9月13日	金魚振れ売り師 (長洲町)	【伝統文化】金魚売り・金魚すくい体験
3	トイレ掃除体験 9月14日	ボランティアグループ 「イタチごっこの会」 (長洲町ほか)	【清掃活動】トイレ掃除の学習
4	壁新聞製作 9月15日・19日		学習のまとめ
5	老人ホーム交流 9月20日	荒尾市社会福祉事業団 緑風園(荒尾市)	高齢者との交流 音楽発表
6	単元発表会 9月21日	くまモン (熊本県営業部長兼しあわせ部長)	体験のまとめ発表 体験の共有、価値・意味づけ

### キャリア発達の視点から

「働く」キャリア発達には、その土台づくりが重要です。（右図）小学部段階で特に大切にしているのは「興味のあるお手伝いや係活動に十分取り組み、働くことの意義や楽しさを実体験から学べるようにすること。」「見る・まねをする活動を通し、人から教わる姿勢を育てること。」「経験を通し、出来る・役に立つ喜びを十分味わえるようにすること。」です。以上のことから「イタチごっこの会」様からプロの手ほどきを受ける本学習は素晴らしい題材と考えました。



### 「トイレ掃除」を題材として選定した理由

この学習の題材として「トイレ掃除」に取り組んだ理由は以下の2点です。

すでに掃除活動として取り組んでいる内容を、専門家から正しく学んで欲しい。

きれいにする活動から、人のためにトイレをきれいに使う気持ち（公德心）につなげたい。

### 学習の様子

4・5・6年生の児童が各教室のトイレや職員トイレをイタチごっこの会の方々と一緒に掃除しました。トイレ掃除に意欲的な児童や、トイレ掃除の経験が少ない児童など、実態は様々でしたが、イタチごっこの会の方々から授業の始めに掃除道具の使い方や掃除の手順などを、イラスト付きの説明で児童に丁寧に教えて頂きました。

トイレ掃除は、まず始めに便器にたまった水をスポンジで吸い取るところから始まり、そのあとに石けんを付けたポリネットで便器の黒ずみなどを磨いていきました。児童は、便器を磨いていくうちに黒ずみが取れ、まっしろになっていくのを見て驚いたり、きれいになった部分を嬉しそうに報告したりする姿が見られました。磨けば磨くほどきれいになっていくトイレ掃除の面白さを感じ、真剣に取り組む児童の姿がとても印象的でした。日頃使っている便器や手洗い場、そして床まで時間をかけてじっくり掃除することができました。

## 学習を終えて

トイレ掃除学習中、イタチごっこの会の方から「すごいね」「上手だね」と誉められたり、掃除後に他のクラスの児童や先生方から「きれいになったね」「ありがとう」と言われたりすると、嬉しそうに笑顔になる姿が多く見られました。周りの人から誉められたり、感謝されたりすることで、児童はやりがいや役に立つ喜びを感じることができたのではないかと思います。さらに、児童の感想には、「トイレのボタンにいた青さびをはぶらしとクレンザーできれいにしました。うれしかったです。」「といれがきれいになってきもちよかったです、うれしかったです、すっきりしました。」「せんせいにほめられました。」「といれそうじがすきになりました。」という意見があがり、きれいになったトイレを見た時に達成感や満足感が得られたことも分かります。

現在もトイレ掃除を続けていますが、以前より丁寧に取り組めるようになっただけでなく、トイレを大切に使う気持ちも育ってきていると思います。中には「便器磨きがすきです。」といううれしい声も聞こえてくるようになりました。

## トイレ掃除の様



## 今後の取り組み

日本理化学工業株式会社の大山泰弘会長は著書で、「人間の究極の幸せは、人に愛されること、人にほめられること、人の役に立つこと、人から必要とされることであり、『働く』ことによってその幸せは得られる」と述べられています。このことから、トイレ掃除等の活動を通して身につけたのは、単にスキルの習得にとどまらず、4つの幸せを基礎として培われる「自己肯定感・自己有用感・自己有能感」の育成だと言えます。

「働く」生活の基礎作りは、早期から計画的に行う必要があります。しかし障がいのある児童生徒は、様々な理由によって、生活に根付いた諸活動の経験が少なく、結果として学びの機会が少ない傾向にあります。今回の学習は、トイレ掃除活動を通じて、身近な集団（学校）の一員として役割を果たす活動を学ぶものでした。体験は更に日常の生活にも活かされています。このような、役に立つ・認められる経験が、自分の役割を理解し責任感をもって取り組もうとする勤労観の形成につながり、そして将来の「働く」力につながっていくことを願っています。